

佐竹眞明著

『フィリピンと日本——戦争・ODA・政府・人々』

東京、梨の木舎、2023 年、164 頁、2,000 円＋税

ISBN : 978-4-8166-2303-5

辻 貴志

TSUJI Takashi

アジア太平洋無形文化遺産研究センター (IRCI)・アソシエイトフェロー

著者は名古屋学院大学国際文化学部の教授であり、フィリピン研究の分野においてフィリピン国内の地場産業（佐竹 1998）と日比国際結婚（佐竹・ダアノイ 2006）の研究を牽引してきた著名なフィリピン研究者である。

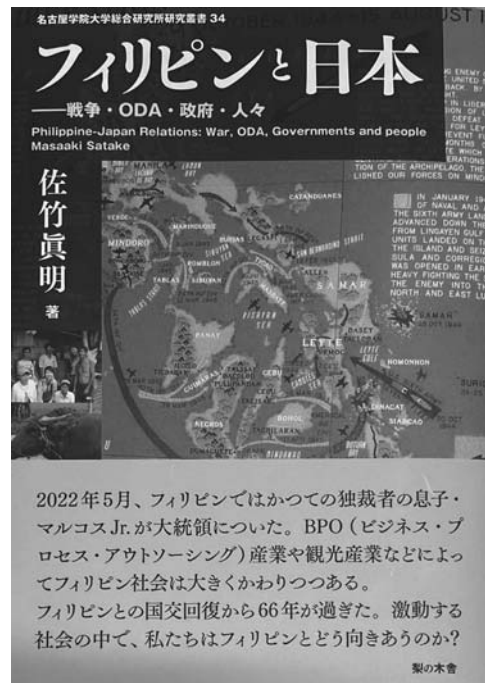
本書は、フィリピンと日本の双方の関係について、戦争（第二次世界大戦）、ODA、政府、人々を切り口に、著者自らのこれまでの研究史を振り返りながら紐解くフィリピン研究の入門的な学術書である。本書は、全 5 章から成る。

第 1 章「戦争」では、日本がフィリピンを軍事的に侵略した戦争の歴史（1942～1945 年）を取り上げる。この戦争では、110 万人ものフィリピン人が日本軍の犠牲となった。今日でも戦争の記憶はフィリピンの人々の心の中に残るが、その背景として日本軍の残忍な殺戮行為や従軍慰安婦問題が横たわる。著者は、フィリピンでの戦争の過去を同国への莫大な財政支援によっ

て相殺し、フィリピン人を懐柔し歴史を風化させようとする現在の日本政府の姿勢に疑問を抱く。そして、日本人の歴史認識について被害者だけでなく加害者の視点からも見る必要性を指摘する。

第 2 章「賠償協定と政府開発援助（ODA）」では、1971 年に開始された日本のフィリピンに対する戦後賠償責任である ODA の問題点を明らかにする。ODA は戦争被害者個人に対する援助ではなく、実質は日本政府によるフィリピンでの開発事業である。日本企業が事業を展開しやすいよう、援助金が時のフィリピンの政権へと流れる仕組みを著者は問題視する。つまり、ODA はフィリピン人一般に対する真の援助ではなく、フィリピンの人々の健康や環境を日本の国益のために犠牲にする。そこに、著者は我々日本人の ODA に対する当事者性を問いかける。

第 3 章「戦後日本との人流」では、日比の国交回復（1956 年）以降の関係を考える。戦後、



多くの日本企業がフィリピンに進出したが、日本国内では許されない人々の健康や環境を害する「公害輸出」を伴った。日本人によるフィリピン戦没者の遺骨収集ツアーも始まった。日本の好景気時（1980 年代）には、日本人男性によるフィリピンでのセックス・ツアーも国際的な非難を浴びた。大量のフィリピン人女性が興行で日本に押し寄せる「ジャパゆきさん」現象も起きた。そして、日比結婚が国際結婚の潮流となった（1990～2000 年代）。このように、本章では戦後ますます日比の関係が良くも悪くも密になった問題と課題を明らかにした。

第 4 章「ドゥテルテ、大統領選挙、マルコス政権と日本」では、「麻薬戦争」として超法規的な殺人を正当化したフィリピンのドゥテルテ元大統領（在任期間：2016～2022 年）の国内での支持率の高さが、国内の犯罪率の減少に対する国民の期待によることを示す一方、日本政府が国益促進のためにその政治手法を批判しない点を問題視する。また、かつての悪名高い独裁者の息子であるマルコス現大統領（在任期間：2022 年～現在）を、特に今日の若い世代が支持する理由を分析し、そのイメージ戦略、情報戦力、知名度が主な要因であることを導き出した。本章では、フィリピン政治のアクターと特色についても取り上げ、フィリピンの政治風土を紹介し、今後の同国の政治の行方を検討した。

第 5 章「変わるフィリピン社会経済と近況」では、これまで貧困国として知られてきたフィリピンの経済成長率が近年著しく高い水準にあることに触れ、著者は BPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）産業と観光業の発展をその要因と捉える。BPO 産業は、フィリピン人の英語運用能力の高さから高成長している。観光業は韓国、中国、アメリカからの観光客が主に支え、LCC（格安航空会社）、ビザなし入国、観光業への国家的投資を基盤としている。同時に、中産階層の出現により海外旅行するフィリピン人の数も急増している。しかし、フィリピンには、自らを貧困と感じる世帯が 48% にも上ることを等閑視しないよう著者は注意を促す。

以上、本書は、戦争中の出来事を踏まえた上で、1980 年代から現在に至るまでのフィリピンという国の変化を、著者の研究の軌跡と併せて捉える試みであり、フィリピン研究史の一端を知る上で大変興味深い。本書は日比関係を「繋がり」として、戦争、ODA、政府、人々の視点から考えることも意図している。そして、これらの問題を日本人、特に若い世代が考えるきっかけを創り出そうとしている。ただし、フィリピンの通史について本書は対象としておらず、著者が訳出に関わった他書（デ・ロブレス編 2023）に譲ったのであろう。

日本がフィリピンをひどく侵略した歴史について詳しく知る人々は、日本ではもはや少ない。むしろ、フィリピンは貧しい国であり、治安が悪く、売春婦のいる国とネガティブに捉える世代が存在する。一方で、若い人々はフィリピンに対する知識や関心が薄く、むしろ同国に対するイメージがブランクスレート（空白の石板）の状態にあると評者は考える。著者はこのような歴史認識の歪みを厳しく突き、深く相手と自己を知ることが真の理解に繋がるとする。そこには、著者がアジア学者の鶴見良行や村井吉敬の薫陶を受けたことから、アジアの問題を日本や世界との関係から考える姿勢が強く窺える。ODA を始め日本政府がフィリピンに及ぼす悪影響に著者は争う姿勢を貫徹しており、鶴見や村井との共通点が認められる。

著者はまた、フィリピン人研究者メアリー・アンジェリン・ダアノイと国際結婚し、日本人とフィリピン人の国際結婚に付与された「偽装結婚」や「農村花嫁」といったネガティブな問題を分析し、そこから日本人とフィリピン人双方のポジティブな関係を見出そうとしている。日本人とフィリピン人の親をルーツに持つテレビタレントやスポーツ選手の活躍が、日本でのフィリピン人の悪いイメージを払拭する一つの原動力であることにも注目する。このように、著者のフィ

リピンと日本を繋ごうとする姿勢は本書の随所で見て取れる。

以上のように、著者は、常にフィリピンの歴史や政治や文化を世界に向けて発信してきた (cf. Satake 2003)。評者は、著者のフィリピンでの魚醤や鍛冶といった地場産業の研究、そしてフィリピン人との国際結婚の研究に着目してきた。魚醤と鍛冶の研究は、著者が先陣を切って取り組んできた独自の領域を占める。日比の国際結婚については、一般書が巷にあふれるが、著者は日比の国際結婚を学術的に研究した。このような研究は、フィリピン研究の分野において実に少ない。よって、著者の研究の意義と有用性は極めて高い。

本書は、生粋かつベテランのフィリピン研究者が著した若い人向けのフィリピンの歴史、政治、文化に関する安価な入門書であり、著者のこれまでの研究の軌跡を知る上でも極めて重要な書であると評価できる。日比関係史を理解する上でもコンパクトにまとめられており、両国の関係について関心がある多くの人々に一読をお勧めしたい。

参考文献

デ・ロブレス、アイリーン・C 編／ピロリア、エベリーナ・M、ガブアット、マリア・アナリン・P、キソル、メアリー・クリスティン・F、レイグ、チョナ・P、トルクアートル、ドロレス・マリア・H (2023) 『世界の教科書シリーズ 48 フィリピンの歴史—フィリピン小学校歴史教科書〈5・6年生〉』 (佐竹眞明・菅谷成子・玉置泰明訳)、東京、明石書店。

佐竹眞明 (1998) 『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論—鍛冶屋と魚醤』 東京、明石書店。

佐竹眞明・メアリーアンジェリン・ダアノイ (2006) 『フィリピン—日本国際結婚—移住と多文化共生』 東京、めこん。

Satake, Masaaki (2003) *People's Economy: Philippine Community-based Industries and Alternative Development*. Manila: Solidaridad Publishing House.